

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 梶井基次郎『檸檬』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 22 回のツイキャス読書会の課題図書は、梶井基次郎の『檸檬』です。

[青空文庫版はこちら](#)

[朗読はこちら](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『檸檬』の感想文

梶井基次郎の「檸檬」はタイトルは知ってはいたが、読むのは初めてだ。意外にも短く、完成された作品というよりむしろ習作として書かれたような印象を受ける作品だ。

「檸檬」が書かれたのが 1925 年の戦間期で、この時代の作品にしばしば描かれるように作者は結核を患っており、実際その後 31 歳の若さで亡くなっている。

結核療養中のためか、あるいは神経衰弱や借金も相まって、作品の前半は暗く、憂鬱な雰囲気醸し出している。そんな状況からの現実逃避なのか、「私」はかつて見た美しい色彩のものや離れた土地の風景に思いを馳せる。「私」の色に関する感受性は豊かだ。

そんなときにふと八百屋で見かけたレモンに心を惹かれる。今、自分の目の前にレモンがあるわけではないが、確かにレモン的人工的とも言える他とは格別な色、整った紡錘形、ひんやりとした触感、小ぶりの割に確かに感じられる重量感などじっと手にとったり眺めたりしていると不思議な感覚に捕らわれるのは何だか理解できるような気がする。

1 つのレモンを携えることで「私」は憂鬱な気分が晴れ、気分が軽くなって、普段は避けていた丸善に入り、画本とレモンを並べてみたり、果ては悪戯心から爆弾に見立てて置いてきたりする。テロが頻発する現代では笑えないブラックジョークのような話だが、同時代の人々にはどう受けとめられたのだろうか？

病気の「私」と瑞々しいレモン、発熱している「私」とひんやりとしたレモン、消えてしまいそうな「私」とくっきりと存在感を際立たせているレモンの対比的な描かれ方が感じられた。

(おわり)

## 『コミュニケーションの三段活用』

これまで読んだ課題図書は、メインテーマに人と人との関わりが描かれていたように思う。しかしこの小説は違っていた。主人公の「私」に関連するリアルな人間関係が一切登場しない。風景や目の前にある自然物への働きかけや解釈が中心で、人間は過去の回想に父母がでてくるだけだ。小説の冒頭に肺炎カタルや神経衰弱と出てくる。新潮文庫の解説に梶井基次郎の作家生活は体調が良くない状態だったとあったので、そのことが作風に影響しているようだ。

レモンは不思議な果実だと私も思う。果汁は酸っぱいだけなのに、皮の香りは全く違う。頬に当てた時のひんやりした清涼感もすごく共感したし、リンゴや八朔と違って片手にすっぽり収まるサイズ感も魅力だ。何よりレモンは口が利けない。一方的な解釈を押し付けても怒られない。

何気なくそこにある檸檬への気づきが、「私」の行動にあらたな展開を引きおこすことになる。

檸檬にすっかり虜になった「私」の心は全能感に満ち溢れた。その勢いで勇気を出して丸善に入った。しかし、以前あれだけ心を惹きつけられた画本はただ手の筋肉に疲労感を残すだけの代物と化してしまった。レモンという有機物から得た感動に比べて、画本は味気なく思えたのだろうか。画本はしょせん紙であるのに対し、レモンは二酸化炭素や水、光エネルギーから作られた結晶物である。

「私」は何とか両者の統合と和解をはかりたくて、檸檬を中心とした画本のタワーを作ってみた。「私」の心はだんだん目覚めてきて貪欲になる。そして自作タワーと檸檬をその場に置いて帰る決心をする。「私」は、自己の感情に凝り固まった状態から、他者に意識が向けられて行く。自作タワーを目にした人は一体どんな反応をするのだろうか？と。さらに、檸檬爆弾に巻き込まれる人々と混乱する一帯を想像することで、自分と社会の接点を求めているようにも思える。

私には、梶井基次郎自身が生身の人間や社会とのコミュニケーションを欲し、その願望を投影した小説のように感じられた。“無機物から有機物へ、そして人へ。コミュニケーションの三段活用” — 少し強引な読み方かも知れない。これだけ解釈を読み手に委ねられると、けっこうたいへんだ。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

## 檸檬 梶井基次郎 読書感想文

「檸檬」を読んで最初に思ったこと。

この人の、  
些細な景色に  
美しさを見いだす感覚が  
とても好きだということ。  
そして鮮やかに言葉を綴る技術に  
惚れ惚れしたこと。

それから著者の顔写真を見て  
あれ、と思う。  
体格もしっかり  
顔立ちもしっかり。  
もっと華奢な人かと勝手に思っていました。  
ごめんなさい。

繊細で軽やかな文体とは真逆の印象だけど  
こんな感じの男の人って、結構モテたかもね。

さて本題に入りましょう。

「檸檬」は  
梶井基次郎が帝大在学中の大正 13 年、  
同人誌「青空」の 1 号目の巻頭に掲載された短編。  
発足の仲間はあと二人いた。  
「青空」という誌名は、武者小路実篤の言葉からもらったそうです。  
それは「さわぐものはさわげ、俺は青空」というもので、  
たしかに青い空とレモンイエローのコントラストが眩しい。  
狙ってこのモチーフにしたのだと思う。  
色彩感覚がプロですね。

その文体は当時として  
画期的で冒険的だったそうで、  
小林秀雄や井伏鱒二から受けた評価も高かった。

大阪に生まれて  
京都に住まい、大学進学のために東京へ。  
ちなみに麻布の飯倉片町に下宿していたそうですが  
趣味いい感じですよ。シティボーイですね。  
飯倉なら市電が走っていたかな。  
長閑かな東京ライフってところでしょうか。

清貧な暮らしの中に  
美しいものを見つけ  
今日を今日なりに潔く生きる。  
端正で冷静で明るい日常。

暗い現実をつまらないとは言わず  
想像の空を快活に飛びまわり、  
愉快的イタズラまで仕掛けて  
世界を旅してる。

頭の中は飛びすぎているけど心は清い。  
そういうの好きです。

志し半ばで夭折した  
永遠の31歳、基次郎さん、  
大学で同じクラスだったら  
友だちになれたかもね。  
著作本の装幀をして差し上げたかったです。

2017年3月24日  
梶井基次郎の命日に捧ぐ。

(おわり)

メルマガ読者 イノマンさん

## 『憂鬱という名の電車』

梶井基次郎の『檸檬』を初めて読んだ。

僕のイメージでは、この主人公はかなり病んでおられると感じました。

読んでいる時、作家の中村文則さんが気晴らしに夜中に散歩していると言っていたことを思い出した。

また、ウメハラさん、又吉さんも散歩がお好きなようで、行き詰まった時、外に出て散歩するだけで頭がずいぶんスッキリするのだそう。

尊敬している人に散歩好きが多いので、少し前に僕も近所を散歩してみた。

村上春樹さんの「ねじまき鳥クロニクル」ではないけど、自分の住んでいる周辺って意外と通勤で使う道以外は、ゆっくり歩いてみると知らない発見が多いものです。

あれ、ここ空き地だったのにこんな立派なマンションが建ったのか、こんなところに公園が出来たんだな、などです。

駅周辺でも、日々の景色がじわじわと変わってきており、以前の景色を思い出せなくなることがあります。

この主人公は、檸檬の爆弾が、実際に爆発したら面白いだろうなと感じており、憂鬱がやや解消されたのだと思いました。

人間は普通に生きているだけでは、檸檬の主人公のように憂鬱がたまってしまう生き物なので、買い物をしたり、好きな趣味活動をしたりして息抜きをしないといけないと、この本を読んでみて思いました。

僕は仕事の疲れや通勤の電車(満員電車ってなんで、あんなに憂鬱で地獄な気分になってしまうのだろう)などで憂鬱がたまったりしたら、ジョギングしたり、本を読んだり、映画を見たりしています。

疲れている時は、肉体的にはひたすら寝るのも大事かもしれないけど、頭もやはり疲れているので身体を動かす必要があると思います。

あなたにとっての檸檬はなんですか？

現代人にとっては、さわり心地は別として、憂鬱を発散させるものが檸檬ではなくスマホなのではないか？と電車に乗っている人を見て感じた今日この頃です。 (おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 『檸檬』 感想文

このお話は暗くて無声映画のチャップリンの映画のように白黒な灰色な風景のような感じがしました。

私という主人公が持病を持ってずっと調子が悪いのが原因かもしれないけど、日々の生活に疲れている感じがしてすごく重苦しい感じがしました。

でも、いつもの八百屋で鮮やかな黄色い檸檬を見たときに、なぜか気持ちが爽やかな檸檬のようにすっきりとした感じが表現されていて、灰色の風景に檸檬の鮮やかな色が引き立っていたのが印象的でした。

私はレモンと聞くと、世話好きの女子がいつも唐揚げにかけてくれていた事を思い出します。普段それほど存在感のないような果物のように思いますが、時々レモンをかけるか、かけないかで論争が起こっていたり、不思議な果物だなと思います。

人は、苦悩のなかでもほんのちょっとした事、みずみずしい檸檬を目にするというささいな事をきっかけに晴れやかな気持ちになれたり、前向きな気持ちになるんだなと思いましたし、平凡な生活の中でも気持ちの持ちようで変えていけるとそんな気がしました。

生きてると持病があったり、お金がないなど色々な困難な事、悩み事が、あるけれどそれに気持ちが負けて、諦めて生きるより日常にあるささやかな幸せを見つける事が出来れば、それは物質的に満たされるよりも、もっと大切な事じゃないのかなと思いました。

私という主人公の、最後に前向きな気持ちが伝わってきて、灰色の風景が少し色づいたような感じがしました。

(おわり)

## 『 檸檬 』 感想 ～見つからない檸檬～

この小説を読み始めて、すぐに私は不思議な感覚に包まれた。だって、まさに私の心象だったから。私自身、所用で県外の知らない土地に出かけることがある。その際、知らない駅、知らない街並み、絶対に知り合いに出会わない空間…等に辿り着くと、ふと自分が息をしていることに気がつく。何もかも見知った地元の空間で、自らが窒息していたことも同時に気がつく。かといって地元には罪はなく、ただ長年住んでいると空気が段々と濃密になっていき、いつのまにか息苦しくなるのだ。主人公の「私」が抱えている病気や借金のような明確な理由がない「不吉な魂」を、私自身も抱えている。

「私」が美しい音楽や詩ではなく、「見すばらしいもの」に癒されるのは全く理解できる。美しいものに触れるには結構エネルギーがいるのだ。「私」が京都から逃げ出して、がらんとした旅館の一室で横になりたい…という思いも、私にとってはデジャヴだ。決して、家族や友人と一緒にはいけない。なぜなら、彼らは「自分自身」の一部だから。「私」と同じく「現実の自分自身を見失う」ことを楽しむことで「自分自身」に戻れる。決して、矛盾はしていない。私が「自分自身」が全くない場所にたまに行きたくなるのは、そういうことだったのかと合点がいった。

ふと「私」はベタ塗りのレモンエロウ色で単純な紡錘形の檸檬に出会う。今の心象では、色の濃淡があったり、形が複雑なものではダメなのだ。それひとつで完結して、何も思考させないものの方がいいのだろう。その檸檬でいったんは幸福になったが、やはり美しいものだらけの丸善は「私」にはハードルが高かった。しかし、「私」には檸檬がある！そのベタ塗りの檸檬にガチャガチャした色の階調を吸収してもらおう。「不吉な魂」も丸善も檸檬爆弾で粉葉みじんだ！

あー、羨ましい。私にはまだ、「檸檬」が見つかっていない…。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。



# 「檸檬になる日は、もう来ない」

何かをなそうと思えば、日々のパンに生きるしかない。もはや、叶わなかった儂い憧れに思いを馳せるのは、非合理だ。

「こっちが気恥ずかしくなるわい」

『檸檬』を、初めて読んだ高校生の時分の私は、レモンを爆弾に見立てるという青臭いアイデアを、ふん、と笑い飛ばした。侮蔑の印象は、この檸檬以上の可能性を、自分が手にしているという、当時の錯覚からだった。

若さゆえの驕り、健康ゆえの卑劣さ、無分別ゆえの短慮である。吹き上がった高校生だった自分を叱りつけた。

そして、初読から、二十数年がたった。再読した。

圧迫から解放されるための自由とは何か？ 力の入らない腕に、高価な画集を何度も抱えて、その堆積の頂点に、レモンを置くこと。

そして、お高くとまった『気詰まりな丸善』を粉葉みじんにする妄想。

こんな、凡庸で、自分勝手なイメージの、何が、自由なのか？

『えたいの知れない不吉な魂が私の心を始終圧さえつけていた。』

その後、作者の年齢を超えるまでに、私は、とっくに、不吉な魂を飼いならしてしまい、幾つかのささいな挫折に打ちひしがれて、卑怯さをごまかして、自分をやり過ごす術を身につけてしまった。

だから、『檸檬』に、共感することが、もうできない。

無理に、共感しようとするれば、自己否定になりそうだ。

限りある生命のさだめに、抗っている作者の純真さに寄り添おうとしても、今の自分には、嘘になる。

肺尖を病んで悪くしていつも熱っぽい身体が、檸檬のたったひとつで、軽やかに興奮で弾んで、一種誇らかな気持ちさえ感じる。健康を害した人生で、思うにまかせない身体が、ひとつの檸檬の効果で、どんどん冴え渡ってくる。

冷覚や触覚や嗅覚や視覚がフル動員され、ますます、自由の観念は、澄明な輪郭をきわだたせゆく。やがて、絶対の域にまでに高まっていく……笑いの中に消滅していく……

私が、檸檬になる日は、来ないだろう。

ひとつの檸檬が、くじけそうな私を、とことんまで正当化する日も 残念ながら来ない。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>